

The Reminiscence of Exellia 蒼天のヴァルマーレ

宮内庁突入

作成レギュレーション

基本概要

- ・経験点：260000 点
- ・資金：390000G
- ・名誉点：2100 点
- ・成長回数：361 回

制限事項

- ・放浪者／蛮族 PC 禁止
- ・バニラ流派入門・秘伝使用禁止
- ・武器防具強化に関する特殊制限
- ・シナリオ報酬成長回数が 10 以上のとき、その 6 割の偏重割り振りの禁止
- ・戦利品判定は振る

その他注意事項

- ・レベル制限逸脱 PC の Lv シンク
- ・ステータス制限逸脱 PC のステータス再振り分け
- ・成長回数制約逸脱時の強制デッドエンド

メモ群

光の加護の封印 解除順

原作（FF14）だと、氷→土→雷→風→水→炎。

一方 TRExLap2 だと、雷→水→土→氷→炎→風。

超戦艦ムサシ

原作：劇場版蒼き鋼のアルペジオ Cadenza。

故あって、ヤマトが『とある計画』に使用されることもあって、ヤマトの代理を務める超戦艦。超戦艦としての本体とは別に、魔動天使の技術を流用した『メンタルモデル』とも呼ばれる姿を持つ。FF 的なジョブは「占星術師」。運用目的が異なり、発生や人類との敵対関係なども当該作の彼女らとは別物。要するに、ガワと CV が同じだけの別人。

なお、動力源だけで言えば、アルペジオのムサシと同等レベルのものは持っている。

(※GMメモ：勘のいい人なら分かるだろうが、アルペジオのヤマトは白い。そのため、*TRExLap2*世界では『魔導船ラグナロク』の代理を務める。

その他、アルペジオ関連の設定は軒並み変更されており、超戦艦ではあるものの、純ヴアルマーレ製(=人類の手で生み出された兵器)。

つまるところ、『見てくれが似ているだけ』の別人であることに注意されたい)

導入

君達は、『転落する女公の白磁亭』の前で、抵抗組織の手を借りていた。

抵抗組織の長、『長耳』ヒルダと交友を持ち、バックを得たエクセリアは、腕を組んで君達の後ろで黙っている。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「…とりあえず、蒼天騎士の強襲もあったことだ…、いよいよ以てゲスの匂いがする」

そう言って、妊娠初期の症状にも悩みつつも、君達を見る。

エクセリア

「行くぞ。すべてを終わらせるために…！」

コンテンツ解放：強硬突入 ヴァルマーレ宮内庁

強硬突入 ヴァルマーレ宮内庁

君達は、ヴァルマーレ宮内庁へと突入した。

(※GMメモ：構成で不足しているジョブ次第では、面子の補充を行う。

タンク：リリアーナ（ガンブレイカー）

ヒーラー：スチュアート（学者）

DPS：トレス（機工士）、システィナ（巫覡）

エリア 1

蒼天騎士団の側についた神道衛士団の面子が襲いかかってくる…！

敵：神道衛士団の衛士×5

討伐後、すぐに増援。（神道衛士団の衛士×6）

更に討伐後、すぐに増援。（神道衛士団の衛士×6）

君達は、神道衛士団を倒していった。

その奥で、待ち構える影が 4 つ。

美剣のフレデリック

「教皇庁に楯突くとは、いけませんね…。」

蒼天騎士フレデリックが、お相手いたしましょう」

敵：美剣のフレデリック、神道衛士団の衛士×3

美剣のフレデリック以外が撃退された場合、フレデリックの HP を全回復してフェーズ 2 へ。

また、フレデリック以外が倒されていないならば、フレデリックの HP は 50% 以下にならない。

倒しきると、美剣のフレデリックは光に包まれながら撤退していった。

エリア 2

君達は先を急ぐ。

(※GM メモ : RP 待機)

敵：教皇庁の修道士×5

討伐後、増援（教皇庁の銅像×2、教皇庁の修道剣士×2）

君達は更に、敵を倒した。

狂羅のアルト

「来たか…。決闘裁判での借り、ここで返すぞッ！貴様らまとめて、跡形もない肉片に変えてやる！」

敵：狂羅のアルト

狂羅のアルトの HP が 50%以下になった場合、一度だけ HP を全回復して強化される。

また、履行されるまで、狂羅のアルトの HP は 50%未満にならない。

君達はアルトを圧倒した。しかし、撤退を許してしまう。時間をいいように稼がれてい るようだ…。

エリア 3

君達は先を急ぐ。

聖騎士テツオ

「ドブネズミめ！素晴らしい力を、見せてアゲる！」

敵：聖騎士テツオ

君達は、聖騎士テツオを打倒した。

エリア 4（宮内庁ランディング）

教皇庁の最上層で、飛空挺に乗り込もうとする天皇に追いついた。

ミシガン

「陛下…！」

後ろから追い縋ってきたミシガンが、ヴォルフラムを伴い話す。

ヴォルフラム

「予想通り、ミシガンは地下監房に囚われていた。見ての通り、救出は成功したぞ」

(※GM ×モ：RP 待機)

ミシガン

「なぜだ、天皇陛下ッ！

宿敵であったフェルニゲシュが討たれた今こそ、嘘で塗り固められた歴史を正し、竜との対話を試み、ヴァルマーレは新たな未来へと進むべきときなのだ！

なぜ、理解しようとする！」

有仁

「ミシガン…。愚かな従兄弟よ。数千年…そう、数千年もの間、受け入れてきた歴史と信仰を、民は易々と忘れられると思うのか？」

その言葉の後、君達とトーレスが走り始める。

背後で、光の槍を構える昌三がいた。彼はそれを、君めがけて投げる。

(※GM ×モ：RP待機)

トーレス

「危ない…！」

彼は、大盾を構える。

光の槍を受け止め、防ごうとするトーレス。

それに割って入るように、エクセリアはその槍を掴んで破壊した。

エクセリア

「…そうすると思っていたよ。本当に、蒼天騎士が聞いて呆れる」

(※GM ×モ：RP待機)

エクセリアが赤雷の槍を昌三に投げると、昌三の姿はかき消えた。

有仁

「行け…『魔大陸』へ…」

彼の指示に従い、蒼天騎士団は天皇とともに飛空艇でこの場を後にする。

ミシガン

「マティアス卿！」

トーレス

「俺は無事だ！…それよりも、あんな馬鹿げたことをしたんだ、エクセリアを…！」

片膝をつき、髪飾りの代わりに生えていた角が消失しているエクセリア。

エクセリア

「…私はいい。この程度の呪詛、どうということはない…」

素手で戦神の槍を碎いたことに加え、唐突に赤雷を放ったこと也有ってか、右腕が焼け爛れていた。しかし、その手は震えていて、強がっていることが目に見えていた。

(※GM × モ：RP 待機)

エクセリア

「なんて因果だ…。100万人を殺すはずだった男が…イイ騎士の座に就かされるとは…」

何の成果もない帰還

君達は、シンファクシ伯爵邸に向かった。

その道中、エクセリアは君達のうちのひとりに担がれていた。

(※GM × モ：RP 待機)

エクセリア

「悪いな…。途方もない驚怖が、私を揺さぶってしまって…。歩けないんだ、自力で…」

そう言って、エクセリアはシンファクシ伯爵邸に転がり込む。

傷口は塞いでいたが、それでも痛々しい焦げ目が右腕についている。

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「…何も、言わないでくれ」

トーレス

「俺は咄嗟に、担いでいた盾で光の戦士を護った…。それだけだ…。」

だが、恐怖というのだろうな、これは…。エクセリアが駆けつけてくれなかつたら、俺は…」

(※GM × モ : RP 待機)

トーレス

「頼む。恐怖のあまり動けない俺達に代わり、俺達の心を連れて、奴らを追ってくれ…。
どうか、俺達が愛するヴァルマーレを頼む…」

(※GM × モ : RP 待機)

君達は、一度シンファクシ伯爵邸を後にした。
その後、追うように…エクセリアが出てくる。

(※GM × モ : RP 待機)

エクセリアは、少し疎むような、そんな暗い表情をして、君達を見ていた。
やはり、身体が震えていて、リリアーナに支えられながら出てきている状態だ。

エクセリア

「怖かった。折角真っ当な路を征かんとした彼が死ぬのが。だから、私のすべてを賭けて
でも、彼を護るために槍を破壊せざるを得なかった。
ただこれで、この世界は『偽典』と呼ばれる路へと傾いた…。ならばどうするか、分か
るよね………？」

(※GM × モ : RP 待機)

PC への選択肢

- ・この一件を無駄にするものか
- ・成し遂げよう、この国の改革を

エクセリアは支えられながら、君達を真っ正面に見据える。

エクセリア

「…ああ。そうだな…」

神道衛士団本部へ

君達は、その足で神道衛士団本部へ向かった。

ミシガン

「…世話をかけたな、ご兩人」

リリアーナ

「何をおっしゃいます。怪我の具合は、いかがですか？」

(※GM メモ : RP 待機)

リリアーナの問いに、その筋肉を見せつけて言う。

ミシガン

「俺はこの通り、ピンピンしているとも」

それと同時に、過去視が発動する。

ミシガンの直談判

宮内庁のとあるところで、ミシガンが有仁と話している場面が映る。

ミシガン

「白壁王の裏切りこそが、すべての発端であり、ヴァルマーレ神道はその真実を隠し、偽りの建国神話を作った…それを数千年もの間、民にひた隠しにしてきた！いや、その民ですらも、すべては十二騎士の血に連なる者だったのだ…。そうなのだな、天皇陛下！」

それを聞き、有仁は目を開く。

有仁

「如何にして知り得たのかは、敢えて問うまい。…ただ、それは正しいと答えておこう。

ヴァルマーレ建国の祖である白壁王は、配下の十二騎士を率いてフェルニゲシュの妻、ペルーダを騙し討ち、双眸を奪って喰らい、人知を超えた力を得た。

それは紛うことなき、友たる竜への裏切りだ…。フェルニゲシュが怒り狂ったのも、無理からぬこと。その後の顛末は、お主も知るとおり…」

ミシガン

「1週間もの激戦の末、王の兄弟は死に、十二騎士の半数ほどもまた、討死した」

有仁

「…だが、フェルニゲシュもまた倒れ、ふたつの『眼』が、生き残りの騎士たちの手に渡ったのだ。誤算だったのは、両眼を失って尚、邪竜が生きていた事よな。奴はフレースヴェルグの眼を借り受け、蘇ったのだ」

それに対し、ミシガンが言う。

一方、白壁王の息子、十二騎士のひとりのハルドラスは、邪竜の眼から力を引き出し、戦う術を編み出し対抗した、と。

それに同意し、有仁はただ事実を述べていく。

有仁

「さて、我が従兄弟よ。ここで問おう。果たして先祖が犯した罪は、誰が償うのか？」

ミシガン

「…何が言いたい？」

有仁

「人の命は短い…。一代でその罪を購えぬと言うのなら、いつの世代まで、償いを続けなければならないのだ？」

それを聞き、ミシガンの言葉が詰まる。

有仁

「蜜月関係にあった竜を裏切った、王と十二騎士の行いは、まさしく罪よな。だからといって、罪人の子孫であると言う理由を以て、このヴァルマーレの民が、永遠に苦しめねばならないのか？」

儂にはできんよ。父祖の罪のため、我が子が、ヴァルマーレの民が、殺されてゆくのを黙って見過ごすことなどな…。竜は、悠久の時を生きる存在…。裏切りの記憶を抱えた奴らに、謝罪など通用せん。なればこそ、子らを護るためにには、命がけで戦わねばならん。

そして、命を賭すために、人は理由を必要とし、戦いに身を投じるためには、正義を求めるものなのだ。…喻えそれが、作られた紛い物だとしてもな」

食ってかかるように、ミシガンが吼える。

ミシガン

「そんなくだらん理由で、戦争を続けるのはバカだろうが、有仁ッ！未来永劫、その罪を重ね続けるのは、歴史が違うと証明しているだろうに！お前の言い様は、支配する側の詭弁だ。子を護るといいながら、その子らにこそ、血を流せと命じているに過ぎない！」

有仁

「そうだ。その通りだ。効率的に戦うため、貴族と平民を分けることもした。数千年後の謝罪が何になろう？お前の言うことは、ただのまやかしだ。

敢えて問おう。戦で家族を失った民に、そなたらの家族は、偽りの正義のために死んだのだと伝えるのだな？」

ミシガンは遂にキレた。

ミシガン

「伝えなければならぬことを伝えないほうがいい、とでもいうつもりか、有仁！」

有仁

「歴代の天皇が、偽りと知りながら、数千年の戦いを続けてきたのはなぜか…。どうやらお主には、まだ見抜けてはおらぬようだな。

失望したぞ、我が従兄弟よ。だが、数千年の禍根を断つという点においては、儂もまた決意を固めておる。真の変革のためにな」

号令とともに、蒼天騎士のアルトと昌三がミシガンを取り囲む。

有仁

「そやつは、地下牢に繋いでおけ。他に『眞実』を知り得た者がいないか、よくよく調べることも、忘れぬようにな」

昌三

「御意…」

過去を視た意志

君達は、過去視を終える。

リリアーナ

「その様子だと、過去を視たようだけど…大丈夫ですか？」

(※GMメモ：RP待機)

ミシガン

「これが『超える力』…。かつての龍姫公が警戒した能力…。星の光が、お前に宿した力か…。今、お前達が語ったことがすべてだ。俺は、従兄弟の…いや、有仁の言葉に、これ以上、切り結ぶ刃を持たなかった」

リリアーナ

「言葉とは、時に空虚なもの。人の意志こそが、真理を貫くのだと、私は我が主君と友に教えられました。そうであると仮定して、多少は考えてみたのですが、パズルをしようと異常なピースが気がかりです。歴代の天皇が『千年戦争』を続けた理由と、『真の変革』…」

リリアーナの思考が停止する。重要なピースはある、あるのだが…まるでそれを理解するのに必要なピースがないように感じるのだ。

エクセリア

「…恐らく、蒼天騎士が異常な力を発揮したことに、何らかの手がかりがあると思える。

あわやトーレスが死にかけた、あの一撃を放った昌三の力は異様だった」

ミシガン

「…建国の神話に謳われる、天皇の御前に並ぶ十二人の騎士…ナイト・オブ・ラウンド。

奴らは、聖なる力を帯びていたという…」

リリアーナ

「歴史は人によって綴られ、宗教は神話を作り出す。やがて、人の想いで作られた『嘘』は、人々が望む物語に変わり、『偽りの真実』になる…。

…え、マズくないですかそれ？」

(※GM メモ : RP 待機)

エクセリア

「蛮神、ナイト・オブ・ラウンド…！」

アルトリア・キャスター

「…そうか、そういうことでしたか…！事態は刻一刻を争います。気を付けて」

そう言って、君達にヴァルマーレから明確な『依頼』が舞い込む。

依頼：ナイツ・オブ・ラウンド討滅

依頼主：G1 ミシガン

報酬：45000G+手付金 15000G

依頼内容：蛮神「ナイツ・オブ・ラウンド」の撃退

依頼文：

まさか、敬愛していた天皇陛下が、まさか蛮神だとは思ってもいなかつぞ。

何、特に異様なことは言わんよ。ただ単純に、依頼として奴の撃退を依頼したい。

蛮神を討伐するのは、君達の戦いに於いては普通だろう？

騎神の手がかりを求めて

君達は、一度隠れ家に戻るだろう。

そこに、クリストフもいる。リリアーナが露骨に嫌そうな表情をしているが、仕事だと思って割りきっているようだ。

クリストフ

「現天皇と蒼天騎士たちを乗せた飛空艇は、東の空へと消えた。

そこで私は直ちに、帝都上空を監視する監視所…『薙環陣地』に確認してみました。

すると、当地を管轄する桜卿から、天皇座乗艇『ソラール号』の目撃情報が寄せられました。これが意味することは分かりますね？」

スチュアート

「…では、天皇たちは『赫界雲海』にいると？」

(※GM ×モ：RP待機)

クリストフ

「ええ、そのように考えても差し支えはないかと。

桜卿からの報告によると、『ソラール号』は雲海北部に広がる『高空層』に向かったようです。彼の地はバヌバヌ族の勢力が強く、桜卿ら城薙家の騎兵団は駐屯していない。

危地に赴ける手段を探す必要があるのです」

(※GM ×モ：RP待機)

クリストフ

「いえ、ここは私の知己を頼ります」

そう言って、自分の実力しか信じなさそうな天才科学者は、通話の耳飾りを使用してある人物に話しかける。

通話相手

「もしもし、クリストフ？もしかして、ヤマトに用があるのかしら？」

(※GM メモ : RP 待機)

クリストフ

「いえ、ムサシ。あなたに用があります。同じ超戦艦ですから、あなたの力を頼った方が早いと考えたので。それにバヌバヌ族の勢力が強い場所に突っ込まなければならない…。

そういうことなので、淵夏から大急ぎで飛ばしてもらえますかね？合流場所は白樺澄基地でよろしくお願ひしますね」

それを聞いた通話先の相手——ムサシは、ため息をついたような形で要望に応じる。

ムサシ

「丁度良かったわね、本当に。私がいなかつたら詰んでたでしょ、全く…」

(※GM メモ : RP 待機)

見識判定 目標値：33

成功時、「メモ群>超戦艦ムサシ」を開示

(※GM メモ : RP 待機)

暫くして、超戦艦ムサシが空中を航行して着岸する。

ムサシ

「ハア————～～～…。途中で嵐に遭ったから大変だった…」

と言って、ムサシはメインデッキで頃垂れる。

(※GM × モ：RP待機)

ムサシ

「お前らが、噂の冒険者？話は聞いてるよ、ヤマトからね。

なんか、風の噂では天皇陛下が蛮神を降ろしたってえ？」

クリストフ

「ええ、厄介なことに。兄が死にかけたのですから、その規模は計り知れませんよ」

(※GM × モ：RP待機)

話を大方聞いたムサシは、少し悩んだ様子であぐらをかいていた。

彼女としても、人間並みの知能しか持ち合っていないのだ、悩むかどうかと言われれば悩むだろう。

スチュアート

「祝福無き者が天皇に接触していたことは、冒険者が掴んでいたんだがね…。何より気になるのは、『魔大陸』という言葉さ」

ムサシ

「魔大陸う～？…うーん、言葉だけなら聞いたことがあるレベルだ、何とも言えないや。

でもアレだろ？祝福無き者は、世界を滅ぼさんと暗躍しているって言うじゃない？それと同じ理屈で、天皇に吹き込んだんじゃない？

とすれば…途轍もない危険な力を秘めた場所、ってことになる」

(※GM × モ：RP待機)

ムサシ

「天皇を放っておけない。ヤマトのためにもね。トウゴ・ランディングに来てもらえる？

高空層にひとつ飛びするよ」

赫界雲海・高空層

赫界雲海の北部は、未だ多くの地域が未開のままである。『魔大陸』へと向かった天皇を追う冒険者ら一行は、この地に足を踏み入れるのだった。

新たな、戦いの火種が迫っているとも知らずに。

(※GM ×モ：RP待機)

スチュアート

「ここが、『赫界雲海』の高空層…。『薙環陣地』よりも高い位置にあるのだな…」

ムサシ

「気を付けなよ、落っこちるかもしれないって言う恐怖だけではなく、ここはバヌバヌ族のテリトリーなんだからさ。彼らを無闇に刺激しないように、注意しないとね」

探索判定 目標値：33

成功時、奥深くまで行った段階で、なにかと遭遇する。

天皇を探して

スチュアート

「ふむ、蒼天騎士の姿もなければ、天皇が乗る飛空艇『ソラール号』も見えないな…」

そう言っていると、遠方から助けを求める声が響く。

びっくりしすぎてムサシが小ジャンプしたレベルだ。

ムサシ

「おいおい、待てよ…。こんなときにディスエリィアだってえ？」

赤軍百人隊長

「ムッ、ヴァルマーレの兵か！？総員、あの連中を捕らえるのだ！尋問して、強硬の行方を吐かせるぞ！」

(※GM ×モ：RP待機)

ムサシ

「チッ、やるしかないか…！冒険者、手を貸せ！応戦して、バヌバヌ族を助けるぞ！」

この戦闘ではムサシも戦闘に加わります。

敵：コミニンテルン・ソルジャー×（人数+15）

助けられたバヌバヌ族は、君達に声をかけてくる。

口ヌバヌ

「これは、これは、本当に助かっただよ！吹き抜ける西風のように、感謝するだよ！
オイラの名前は『口ヌバヌ』ね。善良なる旅のおヒトさま、お礼をさせてもらいたいだ
よ。ぜひ、ぜひ、感謝の気持ちを受け取るね！」

ムサシ

「！？？！？！？！？」

ムサシがドン引きしている。

(※GM × モ : RP 待機)

見紛うはずもない、完全にドン引きしている。

そのまま口ヌバヌの調子に流されるがままに、君達はズンドの村に辿り着いた。

口ヌバヌ

「よくぞ、よくぞ、おいでになったよ！ここが大いなるバヌバヌの、おおらかなズンドの
村ね！」

(※GM × モ : RP 待機)

探索判定 目標値：33

まず挑んだだけで、ズンドの民は温厚な性格であることが分かる。
また、成功時、口ヌバヌを救ってくれたことを感謝するバヌバヌ族が多いこと、それを
見たムサシがドン引きしていることが分かる。

(※GM × モ : RP 待機)

君達の問い合わせに、口ヌバヌが答える。

曰く、『冷酷なるブンド』と同じにされては困る、と。

そのとき、何かが雲を突き破るような、爆発音が聞こえた。

通話の耳飾りも、君達に向けて反応する。

(※GM × モ : RP 待機)

リリアーナ

「聞いて下さい！雲海の中で、ディスエリィアの巨大飛空戦艦が、蛮神と交戦しています！例の雲海を泳ぐ、獣型の蛮神です！」

…一難去ってまた一難。未だこの禍根からは抜けられそうにない…。

(※GM ×モ：RP待機)

エクセリア

「何…？雲神『フヴィートヴァル』とコミニテルンが！？」

口ヌバヌ

「それは、それは、雲神さまね！？」

上空を、逃げるようすにフヴィートヴァルが通る。

その体表には、傷痕が大量についていた。

その傷を癒やすためか、浮島のひとつを喰らう。

エクセリア

「…浮島のクリスタルを喰ったのか…？」

口ヌバヌ

「ぬおおおおおん！

まだだ、まだだ、浮島が食べられたね！これは、これは、一大事よ！」

その叫びに、フリーズしていたムサシでさえも、口ヌバヌに向き直る。

(※GM ×モ：RP待機)

口ヌバヌ

「旅のおヒトさま、ズンドの長老様に会ってほしいね！このまま雲神さまを放っておいたら、バヌバヌが住む島は、全部雲海の底に落ちちゃうだよ！」

そして、口ヌバヌは君達をズンドの村に案内する。

この事態に慣れていないのか、口ヌバヌは混乱した様子で、君達に話しかけてくる。

口ヌバヌ

「一大事、一大事、これは一大事ね！さあ、さあ、はやく、長老さまに紹介するね！」

(※GM ×モ : RP 待機)

そうして案内されたところで、彼らの長老は君達を見る。

ソヌバヌ

「これは、これは、歓迎せねばなるまいな！口ヌバヌを救ってくれたこと、島を潤す雨のように感謝致しましょう」

(※GM ×モ : RP 待機)

ソヌバヌとの問答で、口ヌバヌが口を挟む。

曰く、白き鎧の者達は、「魔大陸の鍵」を探しにやってきたと。

しかし、ソヌバヌは語ることを忌避した。そこは禁忌の地、語ることさえ禁じられた悍ましい場所なのだと。しかし安堵せよ、かの社がある島は、冷酷なるズンドが食わせてしまったと。

ムサシ

「ちょっ、それ最初に言いなさいよ！？…待てよ？今「魔大陸の鍵」は雲神の腹の中…。倒せば、これ以上島が食われる危険が減るよね…？」

聞き込み（冒険者+知力B）判定 目標値：ファンブルチェック

成功時、浮島を借り受けことに成功する。

また、この判定は成功するまで繰り返す。

ソヌバヌ

「なんと、なんと、驚くべきことを！

ヒトの勇者は、そのようなことを成せるというのか。なれば、なれば、雲海の平和のため、我らズンドは、柔らかな春風の如く協力せねばなるまい。ズンドの浮島ひとつを、お貸ししよう」

そして、雲神『フヴィートヴァル』を撃退するという、大仕事を担うことになった。
…護魂の靈鱗？勿論、牽引役を務めるムサシに持たせてあるに決まっている。

雲神フヴィートヴァル討滅戦

君達は、雲神フヴィートヴァルを引き寄せるための餌…すなわち浮島を使い、フヴィートヴァルに挑む。

(※GM ×モ : RP 待機)

敵：フヴィートヴァル

君達は、フヴィートヴァルを討滅し、「魔大陸の鍵」が浮島の地面に落ちるのを見た。
その時、光のクリスタルが輝く…。

(※GM ×モ : RP 待機)

光の加護の封印がまたひとつ、氷の封印が解ける。

ハイデリン

「…戦士よ…光の…よ…。聞こ…ますか…我が…が…。闇…迫って…新たな…。
どうか…声が…届いて…ように…」

その声の後、幻覚から醒めた君達は、「魔大陸の鍵」を拾う。
そうして後ろを見たら、黒法衣の女と天皇・有仁がいた。

アルケイア

「雲神『フヴィートヴァル』を屠ったか。何度目かね、こうやって神を狩るのは？もはや
君の力は、『人』とは思えないほどだ…」

(※GM ×モ : RP 待機)

有仁

「天使い殿…。かの者が手にしている品が、例の？」

アルケイア

「そのようだな…。『魔大陸』への扉を開くアル・メナスの秘宝…」

そう言って、彼女は一行を縛る。

(※GM メモ : RP 待機)

アルケイア

「多少は、光の加護が戻ってきてているようだが…、蛮神を倒せたとて、光の加護を失っている今、まるで赤子のようだな、光の使徒よ」

(※GM メモ : RP 待機)

その闇の使徒——アルケイアは、魔大陸の鍵を天皇に渡す。拘束を解き、闇に蝕まれた君達を尻目に、天皇は言う。

有仁

「ご協力に感謝しますぞ、天使い殿。そして、英雄殿にも礼をせねばなるまい。フヴィートヴァルを倒す手間が省けたのだからな。

…準備は整った…。今こそ、天への階段を拓くときよ！」

そう言って、天皇は魔大陸の鍵を翳す。鍵が解錠され、レーザー光が放たれる。

高笑いする有仁を、君達は見ていることしかできなかった。

有仁

「いよいよだ…千年の歪を正し、真なる変革を…人の手に歴史を取り戻す時が来たのだ」

天皇座乗艇「ソラール号」が去って行く。

闇が晴れたとき、君達はただそれを黙って見ていることしかできなかった。

…同刻、封印が解かれた魔大陸が、ヴァルマーレ東方の沖合に出現していた。

リリアーナ

「お疲れ様。とにかく、あなた達が無事でよかったです。超戦艦ムサシの出力には驚かされたよ…。ただ、牽引装置が悲鳴を上げていたのは覚えてるね…。」

それにしても、ここに来て新手の祝福無き者とは…。天皇たちに『魔大陸の鍵』を奪われたことは、想定外だったとしか言いようがない…。しかし、私達はまだ生きているし、祝福無き者や天皇に対して、立ち向かう意志も折れてはいない。諦めずに追撃しよう！」

(※GM メモ : RP 待機)

君達は、一度オク・ズンドの長老たちのもとへ向かう必要がある。
向かった先で、なにか異常が起きていることに気付く。

スチュアート

「静かすぎる…」

向かってみると、ディスエリィアの軍勢が、バヌバヌ族を囲んでいるではないか。

(※GM メモ : RP 待機)

ニコライ・ルニッチ

「まだいたか…。おら、大人しく出てこい！」

彼にはすぐにバレて、君達が出てくることを誘導される。

(※GM メモ : RP 待機)

ニコライ・ルニッチ

「ほう、蛮族どもではなかったか」

君達を見て、感慨深い様子で対応するニコライ。
そこへ、歩いてくる者がひとり。

ウスペンスキー2世

「なるほど、先遣隊を壊滅させたのは、ヴァルマーレの者と考えていたが…、貴様たちだったか」

その鎧に身を包んだ男…アレクサンドル・ウスペンスキー2世は、君達を見て語る。

ウスペンスキー2世

「『写本師』から伝え聞いたとおり、光の戦士とやらは、どこにでも顔を出すものだな」

ニコライ・ルニッチ

「では、彼らが…！？」

ウスペンスキー2世

「そうだ、我が共和国のケルディオン統一を阻む、英雄殿というわけだ。

…貴様たちも『魔大陸』を追っているようだな。フン、当然か…。彼の地には、蛮神を御するための、アル・メナスの叡智が残されている。

貴様ら《暗魂の暁》とやらが嗅ぎ回っても不思議はない。蛮神は、星の命を喰らう化け物だ。故に何としても、そのすべてを殲滅せねばならん…。貴様たちも、それを分かっておろう？」

(※GM ×モ：RP待機)

ウスペンスキー2世の問いに、君達は少なからず応じるだろう。

ウスペンスキー2世

「クククク…。この状況で、よくもぬけぬけと本音を言うものだ。まあ良い、ケルディオン統一など、星の運命に比べれば、些末なことに過ぎぬ。蛮神を制することこそが、国家主席たる我が役目。なればこそ、神を降ろした蛮族を生かしてはおけん」

そう言って、配下の兵にバヌバヌ族…ズンドの民を殺させようとする。

スチュアート

「待て！その者達はテンパードでは…！」

彼らを襲おうとする者達を、ひとつの砲撃が弾き飛ばす。

ニコライ・ルニッチ

「何ッ…！！」

君達の背後には、巨砲を担いでいるケーシスの姿があった。

それを見て、咄嗟にウスペンスキー2世を下がらせるニコライ・ルニッチ将軍。

通信機を用い、空中の巨大飛空戦艦に土埃を起こさせる。

ウスペンスキーアー世

「また会おう、フレイディアの英雄よ。またいざれな…」

上空を悠々と飛ぶ新造飛空戦艦を、スチュアートは睨んでいた。

君達は、一度ムサシまで戻る必要がある。

報酬

基本要素

- ・経験点：27500 点
- ・資金：基本 10000G+ナイツ・オブ・ラウンド討滅手付金 15000G=25000G
- ・名誉点：100 点
- ・成長回数：10 回

その他報酬

- ・フヴィートヴァル・ウェポンチェスト×1